

【活動報告】

2020 年度 EDGE+R レギュラーコース 修了しました！



↑ 修了証を手に記念写真



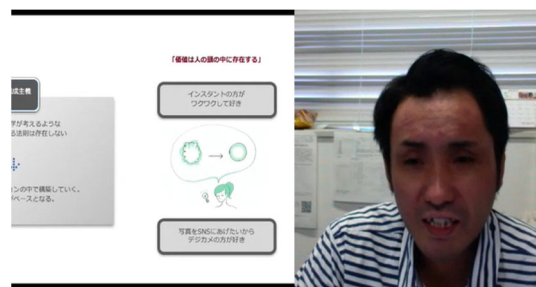
↑ オンラインとのハイブリッド最終報告会

例年春学期に始まるレギュラーコースですが、2020 年度はコロナウィルス感染症の影響により、秋学期に 30 名でのスタートとなりました。

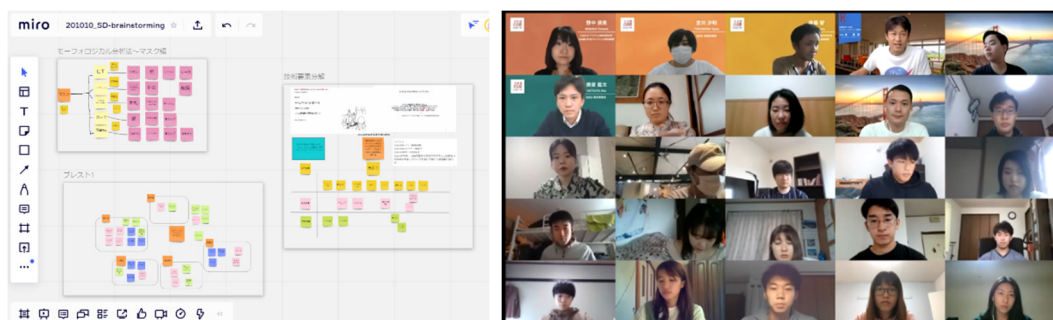
本年度は 3 つのデザインを学ぶと同時に、アイデア創出のチーム活動も並行して行いました。

9 月 26 日に実施した**デザイン・ドリブン・イノベーション（DDI）ワークショップ**では、プログラム副統括責任者の後藤准教授のご指導の下、オンライン会議ツール Remo を使用し、対面で着席しているかのようなシチュエーションで開催しました。「新たなフレーム〈価値観＋ワーキングプリンシプル(価値観の達成方法)〉と創造からビジョン作成へつなげる DDI の手法を学ぶ」をテーマに、自分自身の生活から導き出したフレームを創造し、その後チームでもそのフレームを応用しビジョンを作成す

るというアイデア創出に必要な根本を学びました。



続いて10月10日に**システムデザインワークショップ**を開催しました。MOTの湊宣明教授とプログラム副統括責任者の野中准教授を講師に迎え、こちらもオンライン（ZOOM）での開催となりました。テーマは「技術要素分解法を学び、革新的な製品・サービスのコンセプト設計をグループ協働で具体化」で、オンラインでありながら技術要素分解を実際に体感するために、オンラインホワイトボードツール miro を使用し、事前に用意しておいた不織布マスクの構成要素についてそれぞれが発揮する機能を考え分解し、革新的なマスクのコンセプト設計を創出するワークを行いました。その後、DDI ワークショップのアウトプットとして選定した製品・サービスを「技術要素分解法」という手法を用いて具体的なコンセプト設計に挑み、革新的な製品・サービスをグループ協働で具体化できるようになりました。



最後は、11月14日に**デザイン思考ワークショップ**を開催しました。講師にはセブンアイホールディングスの山田智樹氏を招き、後藤智准教授・野中朋美准教授とともにオンライン（zoom）にて開催しました。テーマは「お財布プロジェクト～理想の財

布を描く〜」。【講義】ではデザイン思考の理論を学び、【ワークショップ】ではチームビルディング、ターゲット業界の選定、チームビジョン、具体的な製品・サービスのコンセプト設計までの到達を前提とし、ビジネスモデル構築プロセスにデザイン思考を組み込みました。

ワークショップの《前半》は、基本フレームを理解するためのWSとして「ウォレット・エクササイズ」を実施し、5つのプロセス「①共感」「②問題定義」「③創造」「④プロトタイプ」「⑤テスト」のうち、本年度は③のアイディアスケッチまでを実際に体感することとなった。《後半》は、設計したコンセプトをビジネスモデルに落とし込むために、「ビジネスモデルキャンバス（BMC）※」を解説し作成しました。



本年度は、講義と並行して**チーム活動**を開始し、10月30日にはオンラインでの中間報告会を経て、教員からのメンタリングを通してアイデアを具体化し、3月19日には最終報告会を琵琶湖の湖畔にある「白浜荘 アネックス淡海」にて開催しました。この最終報告会は今年度初めての対面であった為、前半にチームビルディングをテーマにした「アウトドアでのアクティブな学び（野外研修）」を行い、今後あらゆる場面でも必要となり得るチーム作りの学びを体感しました。そして後半の最終報告会ではチームでこれまで考え抜いたビジネスアイデアを発表、各チームの発表テーマは「危険体験をするVR」、「国内留学プログラム」、「絵のない絵本」など多様な分野に渡るビジネスプランを発表しました。

2020年度はコロナウィルス感染症の影響に左右され、講義もチーム活動もメンタリングもオンラインでの開催という例年にならない環境にもかかわらず、たくさんの学び、

気づきを得られたことに受講生の成長を感じさせられました。

受講生からは、「普段から行っている研究の活動が、どうやったら実践へと繋がられるかがよくわかりました。課題を解決するためのソリューションをこれまでにないやり方で組み合わせ、意味のイノベーションを起こすということも、非常に勉強になりました。イノベーションの方法を体系的に学べたことで、課外プロジェクトでも応用して創発的な動きを作ることができつつあります。デザイン思考やシステム思考を武器に実践の現場でもイノベーションを起こせるように頑張っていきたいと思います。」

「正課の授業や参考書では学べない知識を、EDGE+R プログラムでは多く学べました。私自身が起業をする際には、常に自分のアイデアは革新的であるか、チームの会話が否定から始まっていないか、この2点に注目して進めていきます」といった声が多く聞かれました。

1年間ありがとうございました。